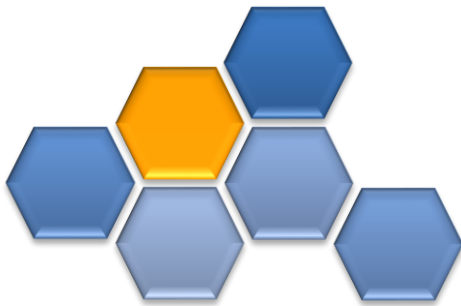


令和元年度 第2四半期運用状況 (退職等年金給付積立金)



1. 令和元年度第2四半期運用状況の概要

【退職等年金給付積立金の基本的な考え方】

- キャッシュバランス方式を採用していることを踏まえ、10年国債利回り等を指標として設定される基準利率を確保可能な国内債券や貸付金を中心に、長期的な観点から安全かつ効率的に運用を行います。

※キャッシュバランス方式…一定の基準(給与の一定割合など)により算定された掛金に、定められた指標(国債利回りなど)に基づく利子を付与して加入者ごとの勘定残高を算定し、その勘定残高に見合った年金または一時金の給付を行う給付設計方式です。

- 第2四半期末の運用資産額(簿価)は、1,783億円となりました。
- 第2四半期の実現収益率(期間率)は、プラス0.68%となり、実現収益額は、11億円となりました。

		前年度	令和元年度				年度
			第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	
期末資産残高【簿価】	億円	1,578	1,644	1,783			1,783
実現収益率	%	1.63	0.36	0.33			0.68
実現収益額	億円	21	6	6			11

※ 年金積立金は長期的な運用を行うものであり、その運用状況も長期的な観点で評価すべきものですが、積極的な情報公開の観点から、四半期ごとに運用状況の公表を行うものです。

(注1) 実現収益率及び実現収益額は、当該期間中に委託手数料等が精算された場合には、これを控除しています。

(注2) 実現収益率は、各期間に係るものです。

2. 令和元年度第2四半期の運用環境①

【第2四半期 令和元年7月～9月の運用環境】

➤ 株式市場

国内株式市場は、横ばい圏の動きで始まりましたが、8月に入ると、米中が互いに報復関税をかけ合うなど貿易摩擦の激化を受けたリスク回避の動きから、大幅に下落する局面もありました。その後、欧米の金融緩和への期待や米中協議再開のアナウンスなどを好感して、世界的に株式市場は大きく反発上昇に転じ、日経平均株価も本年4月以来の22,000円台を一時回復するなど、期を通じて見れば上昇して終わりました。

外国株式市場は、7月末の米連邦公開市場委員会(FOMC)にて、10年半ぶりに政策金利の引き下げが実施されるとの期待から、NYダウなどは史上最高値を更新して始まりましたが、8月に入ると、米中貿易摩擦の激化や欧州景気の不透明感の高まりなどを受けて、大幅に下落しました。その後、米中協議再開の動きに加え、欧州では9月に欧州中央銀行(ECB)が理事会で金融緩和の再開を決定したことやドイツなどで財政刺激策への期待が高まったことなどから、世界的に株式市場は上昇に転じ、NYダウは、期を通じて見れば上昇して終わりました。

➤ 債券市場(長期金利)

国内金利は、欧米長期金利の低下傾向を受け、引き続きマイナス圏で推移しました。また、日銀は期中金融政策を維持しましたが、今後景気や物価の下振れリスクに対して一段と警戒感を強め、金融緩和を模索するとの見方から、国内長期金利は前四半期末比で低下して終わりました。

米国金利は、7月及び9月のFOMCにおける政策金利の引き下げに加え、米中貿易摩擦の激化などを受けた世界的な景気下振れリスクの意識の強まりや追加金融緩和期待などから低下しました。

欧州金利は、ドイツの景気後退懸念やECBによる金融緩和決定などを受け、低下しました。

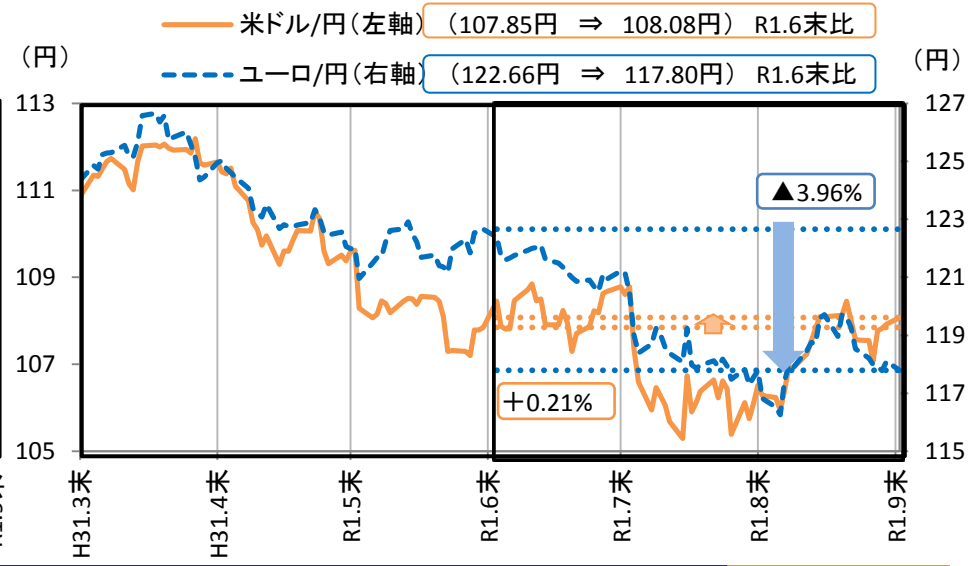
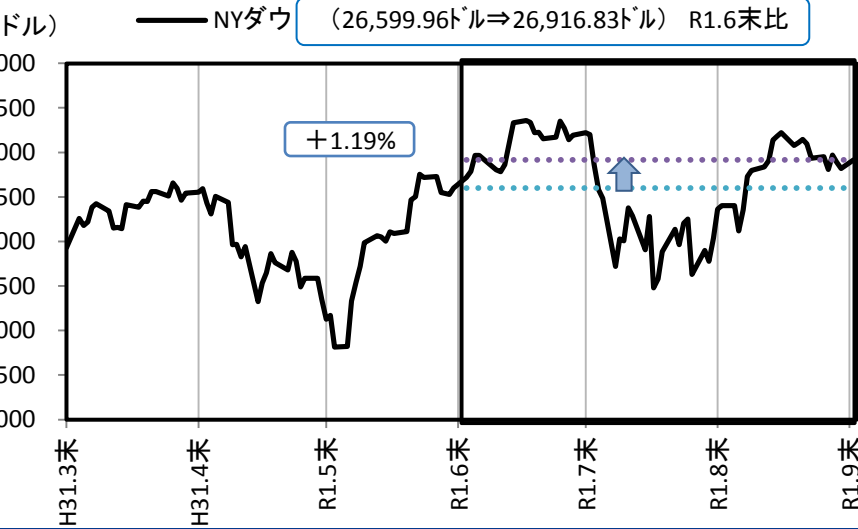
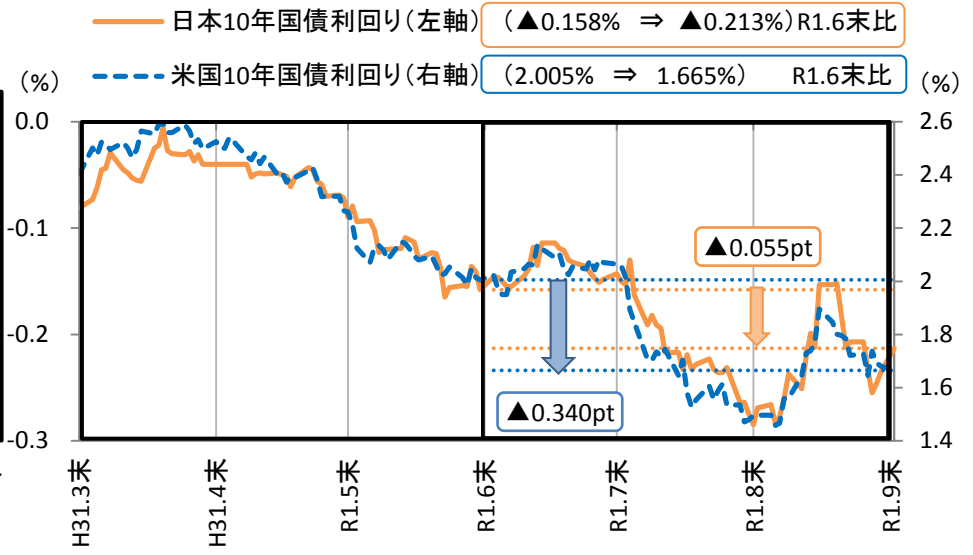
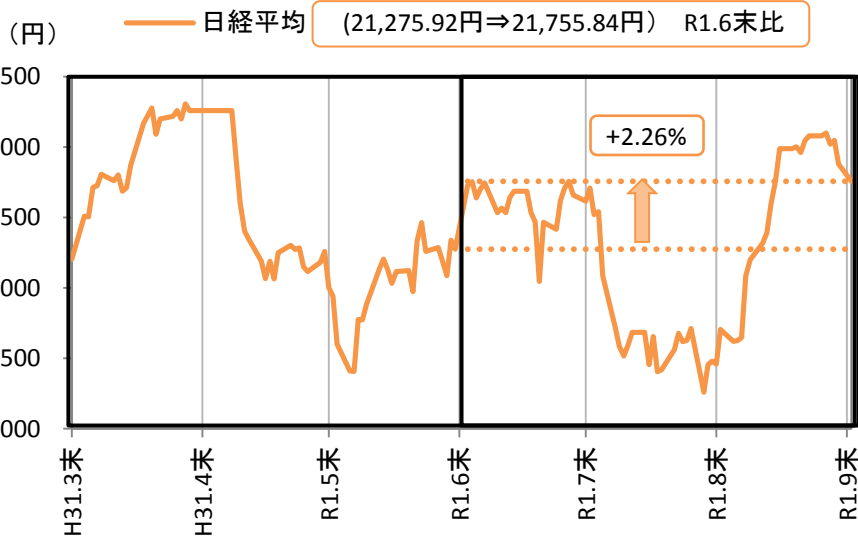
➤ 為替

米ドル/円は、米中貿易摩擦緊迫化を受けたリスク回避要因から円高進行する局面もありましたが、欧米の金融緩和による世界的な株式市場の持ち直しなどを受けて、円安に転じました。

ユーロ/円は、欧州経済指標が大幅に悪化したことやブレグジット(英国のEUからの離脱)懸念から、円高傾向となりました。

			H31年3月末	R元年6月末	R元年9月末
国内債券	日本10年国債利回り (%)	(%)	-0.08	-0.16	-0.21
国内株式	日経平均	(円)	21,205.81	21,275.92	21,755.84
外国債券	米国10年国債利回り (%)	(%)	2.41	2.01	1.66
	ドイツ10年国債利回り (%)	(%)	-0.07	-0.33	-0.57
外国株式	NYダウ	(ドル)	25,928.68	26,599.96	26,916.83
	DAX	(Pt)	11,526.04	12,398.80	12,428.08
	上海総合	(Pt)	3,090.76	2,978.88	2,905.19
為替	ドル/円	(円)	110.86	107.85	108.08
	ユーロ/円	(円)	124.35	122.66	117.80

2. 令和元年度第2四半期の運用環境②



3. 収益率の状況

(単位: %)

区 分	前年度	令和元年度				年度
		第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	
実現収益率	1.63	0.36	0.33			0.68
国内債券	1.64	0.36	0.33			0.69
国内株式	0.00	0.00	0.00			0.00
短期資産	0.00	0.00	0.00			0.00

(注1) 国内債券には、貸付金等を含みます。

(注2) 実現収益率は、当該期間中に委託手数料等が精算された場合には、これを控除しています。

(注3) 実現収益率は、各期間に係るものです。

4. 収益額の状況

(単位:億円)

区 分	前年度	令和元年度				年度
		第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	
実現収益額	21	6	6			11
国内債券	21	6	6			11
国内株式	0	0	0			0
短期資産	0	0	0			0

(注1) 国内債券には、貸付金等を含みます。

(注2) 四捨五入の関係で、各数値の合算が合計値と一致しない場合があります。

(注3) 実現収益額は、当該期間中に委託手数料等が精算された場合には、これを控除しています。

(注4) 実現収益額は、各期間に係るものです。

5. 運用資産額(簿価)の状況

(単位:億円)

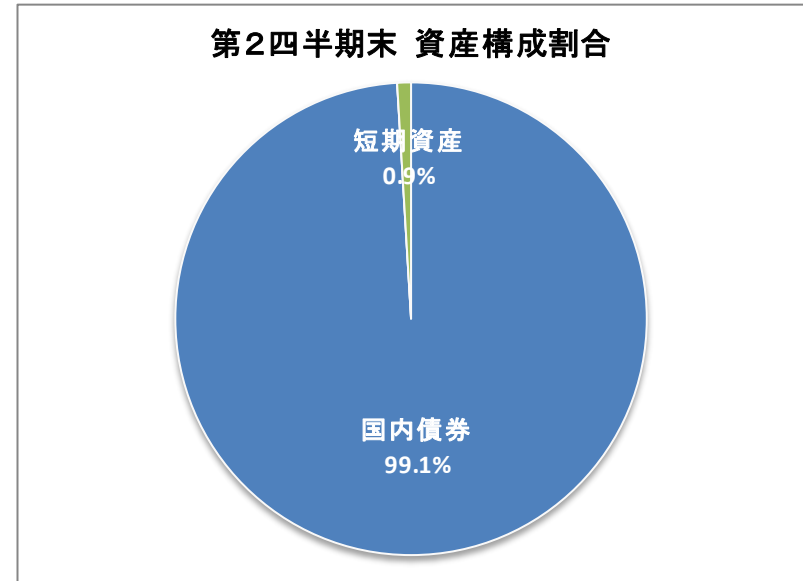
区 分	前年度末	令和元年度			
		第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	第4四半期末
国内債券	1,542	1,637	1,766		
国内株式	0	0	0		
短期資産	36	6	17		
合 計	1,578	1,644	1,783		

(注1) 国内債券には、貸付金等を含みます。

(注2) 四捨五入の関係で、各数値の合算が合計値と一致しない場合があります。

6. 運用資産別の構成割合

区 分	資産構成割合 第2四半期末 (令和元年9月末)
国内債券	99.1%
国内株式	0.0%
短期資産	0.9%
合 計	100.0%



(注1) 国内債券には、貸付金等を含みます。

(注2) 基本ポートフォリオは、国内債券100%(−10%)、国内株式0%(+10%)です。

(注3) 四捨五入の関係で、各数値の合算が100%にならない場合があります。

7. 用語説明

- 総合収益額

時価に基づく収益額を把握するために、利金・配当金や売買損益などの実現損益と未収収益の増減に、評価損益の増減を加えたものです。

$$\text{(計算式) 総合収益額} \\ \text{実現損益} + (\text{当期末未収収益} - \text{前期末未収収益}) + (\text{当期末評価損益} - \text{前期末評価損益})$$

- 修正総合収益率

運用成果の評価方法の一つで、簿価ベースの平均残高利回りに時価の概念を導入した収益率です。

分子は総合収益額を用い、分母は時価総額の平均残高に近似させるため、簿価の平均残高に前期末の未収収益と評価損益を加えています。期間中の資金追加・回収が収益率に影響を与えるという特徴があります。

$$\text{(計算式) 修正総合収益率} \\ \frac{\text{実現損益} + (\text{当期末未収収益} - \text{前期末未収収益}) + (\text{当期末評価損益} - \text{前期末評価損益})}{\text{期中元本(簿価)平残} + \text{前期末未収収益} + \text{前期末評価損益}}$$

- FRB

連邦準備制度理事会(Federal Reserve Board)の略称であり、米国の中央銀行制度の最高意思決定機関です。

7名の理事で構成され、全米12の地区の連邦準備銀行を監督し、FOMC※において金融政策決定を主導します。

※ FOMC(連邦公開市場委員会 Federal Open Market Committee)・・・FRB理事7名と連邦準備銀行の総裁から選ばれた5名を合わせた12名の委員によって年8回定期開催され、金融政策としての公開市場操作方針等を決定します。

- ECB

欧州中央銀行(European Central Bank)の略称であり、EU加盟国のうち欧州統一通貨「ユーロ」を採用している国々(ユーロ圏)の金融政策を担う中央銀行です。

ECB役員理事会の6名とユーロ圏各国の中央銀行総裁で構成される「政策理事会」が月2回開かれ、公開市場操作等の金融政策の決定を行います。

- 金融緩和政策

中央銀行が不況時に景気を刺激するために行う金融政策のひとつです。金利の引き下げや、国債の買い上げなどを行うことによって通貨の供給量を増やし、企業や個人の資金調達を容易にすることで経済の活性化を目指します。

7. 用語説明

- 地政学リスク

ある特定の地域が抱える政治的・軍事的な緊張の高まりが、地理的な位置関係により、その特定地域の経済、もしくは世界経済全体の先行きを不透明にするリスクのことを言います。平成14年9月に米国のイラク攻撃について、FRBが当該用語を使用して以来、マーケットで広く認知されるようになりました。地政学リスクが高まれば、地域紛争やテロへの懸念等により、原油価格や株式相場、為替相場等の経済的変動を引き起こし、企業の投資活動や個人の消費心理に悪影響を与える可能性があります。具体的事例としては、東アジアにおける北朝鮮情勢、欧州・中東におけるシリアを巡る動きから生じるリスク等が挙げられます。

- 政治リスク

一般的には、政情が不安定な国に対して投資する際に負うリスクのことを言います。その意味では、カントリーリスクとほぼ同義と言えます。投資先の国の政治混乱等により投資資金の回収が困難となったり、価値が下落するリスクとなります。また、選挙等の政治的な重要イベントが、その国、或いは地域の政情、経済の先行きを不透明にするリスクも含まれます。

- 長短金利操作

平成28年9月に日銀が導入した金融政策「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」のうちの「長短金利操作」のことを言います。別名、「イールドカーブ・コントロール」とも言います。金融市場調節により、長期金利と短期金利の操作を行うことを指し、具体的には、短期金利は日銀当座預金のうち政策金利残高にマイナス金利を適用する一方、長期金利は10年物国債利回りがゼロ%程度で推移するように、日銀が長期国債の買入れを行い、短期金利より長期金利の方が高い状態にする操作のことになります。従って、様々な要因により長期金利が上下に変動する場面もありますが、日銀による当該操作が続く限りは、10年物国債利回りがゼロ%水準から大きく乖離する可能性は低いものと思われれます。